

Title	スペインのモリスコス追放とその影響について：バレンシアを中心に
Sub Title	La Exclusion de los Moriscos de Espana y sus influencias en el Reino de Valencia
Author	岩谷, 十二郎(Iwatani, Jujiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1966
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.39, No.1 (1966. 7) ,p.43- 65
JaLC DOI	
Abstract	<p>La expulsion de los moriscos, unos 500,000, de los distintos reinos de la monarquia hispanica se efecto entre 1609 y 1616 por orden de Felipe III para que todos estos reinos quedasen puros con la Cristiandad. La mitad de los moriscos expulsados, es decir, 250,000 almas vivian en la Corona de Aragon, y esta cifra era en realidad equivalente a 21 por ciento de la poblacion total de la Corona, y 70 por ciento de estos expulsados fueron los que vivian en el reino de Valencia. Las perdidas demograficas hicieron sentir profundamente sus efectos sobre la economia de Valencia, que figuraba como la region mas florida de Espana, porque los moriscos cumplian sus cargos importantisimos en la vida economia del reino de Valencia. Las consecuencias de la expulsion de moriscos, labradores en su mayor parte, trajeron un problema muy grande: el referente a los prestamos hipotecarios-censos o censales. Generalmente los fondos de la burguesia se habian invertido en la agricultura, pero los pequenos cultivadores, al no poder pagar los crecidos intereses del dinero que se les habia prestado sobre sus fincas, se vieron obligados a cederlas a sus acreedores, los cuales, de suyo, incapaces de cultivarlas, las dejaron yermas. Al no tener rentas de censales, la burguesia acabo por consumir las ahorros que tenian depositados en la Taula de Canvi de la ciudad, lo que motivo la causa principal de la quiebra del mismo banco en 1613. Por otra parte, una repoblacion insuficiente y una peor politica agricola del Trono no podian hacer mas que la ruina de las clases burguesas valencianas quedasen dennitivas con la inflacion y concentracion parcelada. La expulsion de los moriscos, que comenzo afectando a la economia agricola, dejo sentir sus efectos inmediatos sobre la economia feudal, para repercutir, finalmente, sobre la economia burguesa, esto es, acreedora en la estructura economica.</p>
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19660700-0043">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19660700-0043</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# スペインのモリスコス追放<sup>(1)</sup>とその影響について

——バレンシアを中心に——

岩谷 十二郎

フェリペ三世の重臣であり、且つ王の信頼を一身に集めていたレルマ公 Francisco Gómez de Sandoval y Rojas は「方便として回教系人民からスペインの純粋性を保持するために着手したモリスコス追放事業は一六一六年に完了した<sup>(2)</sup>」と語っている。

一六〇九年九月二十二日に開始されたモリスコスの追放は確かに彼の言の如く一六一六年に完了したが、この七年間に追放されたモリスコスは凡そ五〇万人に上っている<sup>(3)</sup>。この数字を一応出身地別に整理してみると表1のようになる。

即ちアラゴン王国では二十五万人のモリスコスが追放されているが、これはスペイン全土から追放された回教系スペイン人の実に五〇パーセントに相当する。うち十七万人がバレンシアに、七万人がアラゴンに、一万人がカタルーニャに住していた。総計二十五万人というこの数字は、十七世紀初期のアラゴン王国の総人口一二〇万人と対比すれば、凡そ二〇パーセントが回教系スペイン人であったことを示す。

カステイリヤ王国の場合はアラゴン王国に比較してこの割合は可成り低下し、約七〇〇万人の総人口に対し二十五万人のモリスコスは三・五パーセントにしか当たらないのである。

スペインのモリスコス追放とその影響について

(四三)

四三

表1 総人口と被追放モリスコスとの相関

	総人口	被追放 Moriscos	総人口との対比
Aragon 王国	1,200,000	250,000 (170,000).....Valencia (70,000).....Aragon (10,000).....Cataluña	20.8%
Castilla 王国	7,000,000	250,000	3.5%

なお、回教系スペイン人の分布、及び追放の際の集結地、或は輸送船の出帆港を地図上に示すと次頁のようになる。矢印は追放の際の移動を示すものである。

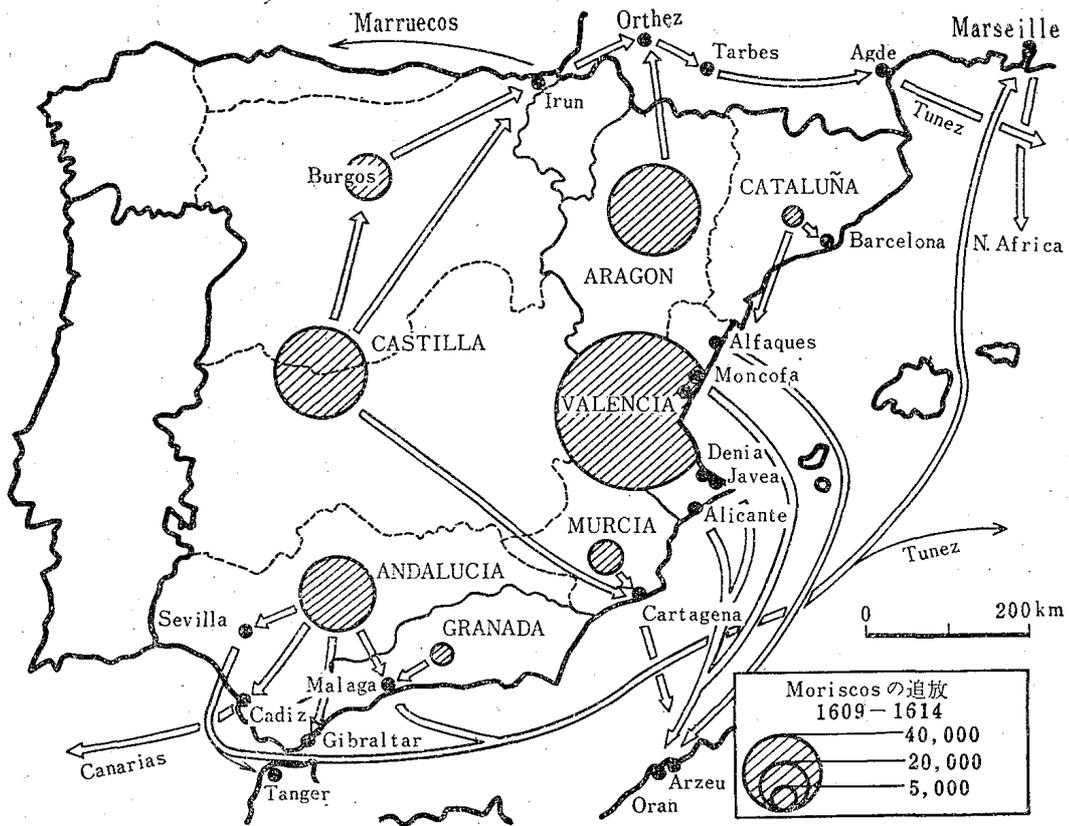
多くの史書は十七世紀以来、モリスコスの追放はスペイン崩壊の根本的原因であると述べているのであるが、追放の具体的時期や数字よりも、論争を主とし、一六〇〇年代が経済的萎縮、或は経済的地盤低下の時代でもあることについてはあまり語っていない。<sup>(4)</sup>

反対に現代の史家、或は経済学者の間ではモリスコス追放の経済的影響をどちらかという<sup>(5)</sup>と過少評価する傾向があるようである。その代表的な例としてアメリカの経済史家 E. J. Hamilton を挙げることができる。彼はモリスコス追放後一〇年間のバレンシアの物価安定の立証を試みている。しかし彼は当時、物価安定を一時的に齎したシシリア、サルディニア、及びカステイリヤからの食料品の大量移入に関する考察を全く欠いているのである。<sup>(5)</sup>

モリスコスはバレンシアに於ては農耕のエリートとして、農業経済構造上極めて重要な地歩を占めていた。従つて追放に基因する構造上の変化の過程を説明することは、とりもなおさず十七世紀スペインの経済的没落の一因を探る結果ともなるのである。

本稿ではモリスコス追放との関連に於て十七世紀のバレンシア経済の地盤低下を六部門に分けて考察してみた。

スペインのモリスコス追放とその影響について



註

- (1) モリスコス moriscos とはカトリック両王の時代以降カトリック教会で洗礼を受けたムーア人を指しているが、その多くが偽装洗礼であったため、正式には新キリスト教徒 *Cristianos Nuevos* と呼ばれるべきところ、多分に軽蔑の意味を含めて *morisco* (半ムーア人) と呼ばれるようになり、そのまま用語上の定着をみた。本稿では時に応じて、モリスコスのほか、回教系スペイン人なる語も用いた。
- なお、スペインの回教徒は時代によつて、*Renegados*, *Muzarâbes*, *Moriscos*, *Musulmanos* 等と呼ばれてきた。(拙稿「十七世紀初期スペインの回教徒追放問題の一断面」史学三〇—四)
- (2) Juan Reglá, *La Expulsión de Los Moriscos y Sus Consecuencias*, en *Hispania*, No. LI, 1953, Madrid, p. 215.
- (3) Juan Reglá, *La Expulsión de Los Moriscos y Sus Consecuencias en la Economía Valenciana*, en *Hispania*, No. XC, 1963, Madrid, pp. 200-201.
- (4) 例えば追放進行中に著わされ、宗教的立場からモリスコス追放に反対の立場を示した *Guadalajara y Xavier* (Marco de-), *Memorable Expulsión y Justissimo Destierro de Los Moriscos de España*, Pamplona, 1613. を始め、又宗教的立場から追放に賛意を表した *Fonseca* (Damian de-),

- Justa Expulsión de Los Moriscos de España, Roma, 1612. など。或は政治的観点から論じたものには Rojas (Juan Luis de-), *Relaciones de Algunos Successos Prosteros de Berberia, Salida de Los Moriscos de España y Entrega de Alarache, Lisbonne, 1613.* Muñoz y Gaviria (José-), *Historia del Alzamiento de Los Moriscos, Su Expulsión de España y Sus Consecuencias en todas las Provincias del Reyno, Madrid, 1861.* Danvila y Collado (Manuel-), *La Expulsión de Los Moriscos Españoles, Madrid, 1889.* などがある。
- (c) Hamilton (Earl J.-), *El Florecimiento del Capitalismo y otros Ensayos de Historia Económica, Madrid, 1948.* Hamilton (Earl J.-), *American Treasure and the Price Revolution in Spain, 1501-1650, Cambridge (Mass.), 1934.*

1

十六世紀から十七世紀初頭に於けるアラゴン、バレンシアでは大農地を所有する貴族のほか、平民層の土地所有が比較的発達しており、そのいづれにも勤勉なモリスコスが多数農業労働者として関与していた。当時のスペインに於いては農耕資本は一般に都市在住のブルジョアから出ていた。従つてモリスコス追放はハプスブルグ家治下のスペインに大きな混乱を齎し弱体な小地主層の崩壊を促した。彼等は損害を能う限り小規模にとどめようとする都市ブルジョアのため、急激に増大した利子支払いに応じられなくなり、担保に入れていた土地を債権者であるブルジョアに譲渡せざるを得なくなった。<sup>(1)</sup>

一方ブルジョアも自ら耕作に従うこともできず、結局土地は荒廢するに任された。追放開始後僅か二年後の一六一一年には「数え切れない程の抵当契約に束縛された」小地主層がある一方、債権者側も「今日でいう一種のクーポン生活者」<sup>(2)</sup>として日々を送らざるを得なかつた。

年賦金、或は抵当利子の混乱の結果、耕作に用いられていた土地は生産の手段から投機的手段へと変つたが、<sup>(3)</sup>やがてこのことが債権者側の崩壊の導因ともなつた。追放開始後、速やかな農耕人口の回復が無い限り、農業経済の急激な没落は

免れ得なかつたと言つて良い。十七世紀のハプスブルグ家治下のアラゴン、バレンシア両王国は決定的な経済的陥没状態に見舞われたのである。すでに追放開始直後の一六〇九年十一月四日附の書翰で、セゴールベ Segorbe の司教カサノバ Casanova は国王フェリペ三世に宛て、次のように述べている。

「新改宗者 Los Nuevos Convertidos のいた地方の地主間に若干の不満と不如意が昂まつているため、当地は危険な状態にさらされている。彼等は従来莫大な Censo を教会、修道院、並に都市に住む *Cavalleros*、或は他の人々に支払つてきた。Censoのうち、あるものはアラブ系の人々の団体に関したことに当てられ、その必要に応じて費われてきたが、あるものは地主の必要に応じて費われるものであり、そうして地主自身はこれによつて翌年新な支払を可能としたのである。今日不逞な者 *mala gente* を追放した結果、アラブ系の者はいなくなり、又その存在を希んでも許されぬという理由から、ある人々は Censo の支払いを全く怠り、又ある人々はその受領の当てを失つたと語つている。結局誰もが Censo を支払いたくないのである。

地主、或はアラブ系の人々の団体に金を出していた人々は、地主と共感を分ちながら自分の財産の喪失と、地主が耕地を抱えてとり残されている様を見て悲嘆に暮れている。とどのつまりセゴールベ全市は地主層に対し、可成り深い忿懣を抱いている。

又この人々がもつと悲しんでいることは、現在は不可能になり、又国王陛下も断じて許し給わぬことであるが、嘗て回教徒の中から入植者を引き出したときのように、旧くからいるキリスト教徒 *Cristianos Viejos* の中から選ばば沢山の入植者がいるのに、地主がそれを希まないということである。

かかる故にアラゴン政庁の当局者が今後平穩を齎す手段を求めていくことが望ましいのである。<sup>(4)</sup>

アラゴン王国に於いては債権者の大部分は小ブルジョア<sup>(4)</sup>、或は都市在住の小ブルジョア<sup>(4)</sup>に属し、教会を中心と

する共同体の中で積極的に社会的活動を行なつていたのであるが、いまやその基盤を全く失うに至つた。但しアラゴン政庁は大農地所有層に属する貴族の利益を擁護するために年賦金の率の靈骨な引下げを行なつて<sup>(5)</sup>いる。しかし貴族も亦モリスコス追放によつて相当数の従順な耕作者を失つたのである。アラゴン王国のブルジョア<sup>(6)</sup>は決定的な打撃を蒙り、この打撃は十七世紀スペインの全国的規模に於ける経済的沈滞の中で眺めると、少数の特権層と零落層の間の社会的隔絶の固定化を促す力となつた。この隔絶はバロック・スペインの社会的特質となつたものである。

以上概括的にモリスコス追放後の、特にアラゴン王国の経済構造に及ぼした変化の一面を述べた。

次にモリスコス追放の影響をアラゴン王国中最も強くモリスコスに依存していたバレンシア王国に求め、具体的にその諸相を述べていきたい。

註

(1) Jaime Vicens Vives, *Historia Económica de España*, Barcelona, 1964, p. 387.

(2) Viñas Mey, *El Problema de la Tierra en España en los Siglos XVI y XVII*, Madrid, 1942, p. 32.

(3) Juan Reglá, op. cit. en *Hispania*, No. XC, p. 203.

(4) Pascual Boronat y Barrachina, *Los Moriscos Españoles y Su Expulsión*, Valencia, 1901, t. II, p. 236.

Casanova の書翰は約二〇〇〇語からなり可成り長文である。内容は本文に掲げたもの以外多岐に亘り、モリスコスの乗船の光景、彼等の最後の宗教的良心等が具体的な筆致で描かれている。なおこの書翰を検討した結果、国王は経済的混乱の

重大さに驚き、マドリッドから急拠十一月十九日附で経済整備計画を内容とする文書を送附し、同月二十九日附で、バレンシア副王カラセーナ侯の命令としてバレンシアで当計画を発表させた。国王はこの文書で総ての *Barones* 及びモリスコスの村落の所有者に文書の発表後十二日以内に放棄された耕地に播種、或は播種させることを命じている。「そうして期間が過ぎても播種せざるときは、土地を抵当としている債権者が播種を行なうことができ、収獲も自由に行なえる。これで先づ播種、耕作、獲入れに要した費用を回収し、残余を負債の償却に当てる。

同様にこれら債権者の財産保全のため、またその喪失を防ぐため、当局は収獲十分の一の教会税 *Decima* 及び他の年貢 *Primitio* の徴税請負人、役人に対し第一年目は教会税を始め、

他の年貢は二分の一まで引下げることが指示する。Barones  
及び村落の所有者も第一年目の収入は二分の一に留めるべき  
[Jaime Boronat y Barrachina, op. cit. t. II,  
p. 237.]

の利率を従来のものの五パーセントに引下げることが成功し  
ている。このため経済の回復の途は閉ざされた。(Jaime  
Vicens, op. cit., p. 387)

(9) Juan Reglá, op. cit. en Hispania, No. XC, p. 203.

## 二

今世紀に入つて以来樹てられた、バレンシア王国の新キリスト教徒（モリスコス）に関する主な業績は、パスクアル・ボロナート・イ・バラチーナ Pascual Boronat y Barrachina のそれを別にすれば、アルゼンチンの史家、アルペリン・ドンギー Halpherin Dongui とフランスの史家、アンリ・ラペイル Henri Lapeyre 並にスペインの史家、ファン・レグラール、Juan Reglá の業績であろう。アルペリン・ドンギーは十六世紀のバレンシア王国の社会・経済構造上の諸問題について鋭い分析を行なっているが、同時に彼はモリスコス系市民の増加、及び信仰、生活面からみた彼等の觀念形成並に国家的視野に於ける連帯意識の有無等を明確にする一方、旧くからのキリスト教徒、即ち宮廷官僚、貴族層、ブルジョアシートとの関係を詳細に記述している。又彼はバレンシアのモリスコス問題を追求する上に段階を設け、次のような位置づけを行なっている。

一、一五二〇年から一五七〇年に至る半世紀間の強引な改宗事業。即ちブルジョアと、都市の職人階級との間の軋轢、又ブルジョアとモリスコスの支持を受けた大農地所有の貴族との間の軋轢に根ざして発生したヘルマニーア *las Germanias* の蜂起の解決手段としてとられた事業である。

一、抑圧とキリスト教の布教。一五六八年のグラナダに於ける蜂起の結果と異端審問によるモリスコス系住民の社会機

スペインのモリスコス追放とその影響について

(四九)

四九

構の緩慢な崩壊を述べている。この際イエズス会員は反モリスコス的心情の表明には直接関与していない。

一、多くの決定事項と追放。

一、モリスコス追放後のバレンシア、並にその結果生じた年賦金支払いの問題と、再植民の問題をとりあげている。<sup>(1)</sup>

他方アンリ・ラペイルはバレンシア王国の地理的事情を考察し、農村から上る年賦金、それも追放の結果を知る上の便宜を考慮に入れ、一五七〇年、一六〇九年、一六四六年の年賦金の合計を挙げ、更に対比を試みて一五二七年、一五六三年、一五八五年、並に一六〇二年に於ける専らモリスコスから上つた年賦金を挙げている。<sup>(2)</sup>

ところで純正スペイン人とも言うべき「旧くからのキリスト教徒」は都市に多数居住していたが、モリスコスで都市に住む者は僅かしかおらず、主として彼等は農村に定着していた。従つて工業と商業に従事するものは旧くからのキリスト教徒であつた。

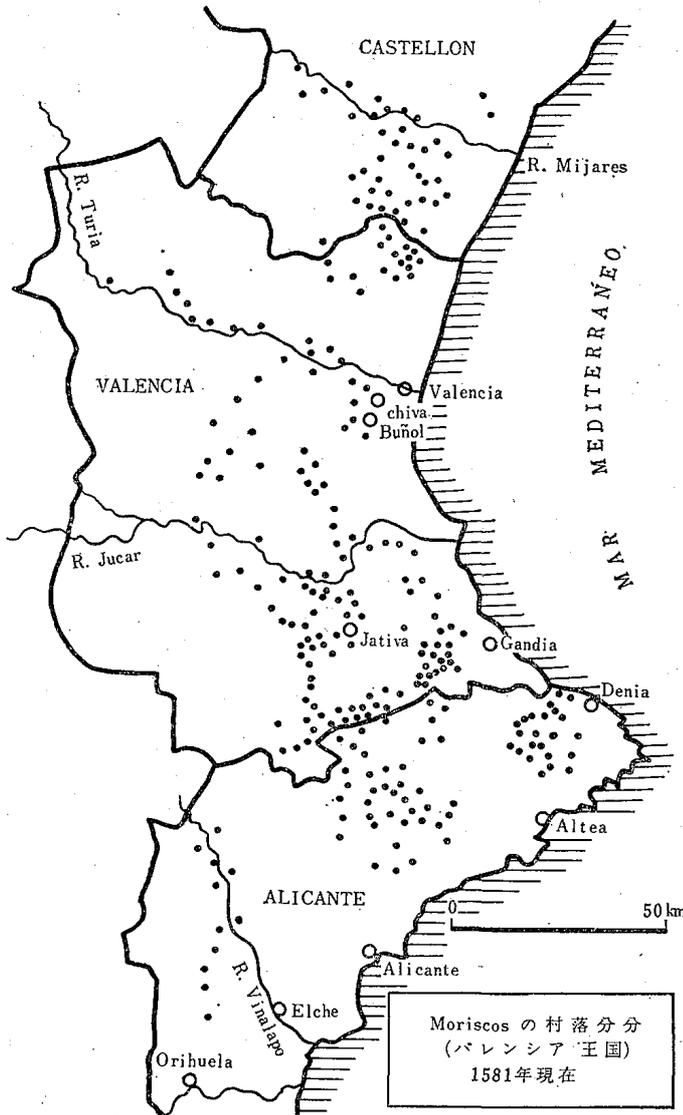
バレンシア王国に於けるモリスコスの定着分布を地図上に示すと、次頁のようになる。

主として彼等は北部のカステリョン Castellon を除いて、圧倒的に乾燥地帯に住んでいた。ミハーレス Mijares 河以南、バレンシアの西部、即ちチーバ Chiba, ブニョール Buñol に至る丘陵地に彼等の集落が散在していた。カステリョンの平原、フカル Júcar の海岸地方、及びオリウエーラ Orihuela、アリカンテ Alicante、エルチェ Elche の沃野等、バレンシア王国の平原部は殆んど旧くからのキリスト教徒の居住地であつた。モリスコスの集落は専ら灌漑の便のあるハティバ Játiva とガンディーア Gandía 附近に密集していた。<sup>(3)</sup> 彼等は王室領を避け、<sup>(4)</sup> 又教会支配下の土地に住む少数を除いて、Barones の土地に多く集まっていた。即ち主として俗権の及ぶ範囲内が彼等の居住区であつた。<sup>(5)</sup>

追放が開始された年である一六〇九年までのバレンシア王国の人口増加を見るに、一五二七年から一五六三年までの間、モリスコスの村落のうち九十ヶ村の人口が漸減しているが、これは北アフリカ移民として流出した結果である。<sup>(6)</sup> それ

にひきかえ別の八十ヶ村は同時期に約七パーセントの人口増加が見られる。一五六三年から一六〇九年までの四六年間にバレンシア王国の総人口を戸数、或は世帯別に見ると、六四、〇七五軒から九六、七三一軒に増加しており、その割合は五〇・〇九パーセントになる。うちモリスコスだけの増加率を見ると六九・七パーセントであり、旧くからのキリスト教徒のそれは四四・七パーセントである。<sup>(7)</sup> 彼等の多く住む首府のバレンシアの場合は人口数は約五万人で、増減はあまり見られず停滞を続けてきた。彼等の増加率の低さの原因として兵役、新大陸植民等が挙げられるが、概して婚姻年令がモリスコスに比較して高かつたということもある。モリスコスの増加率の高さは、彼等の領主から見ればそれだけ収入の増大となつて表われ、歓迎すべきことであつた。一方的なモリスコス系農民の増加率の高さは、結局彼等自身の崩壊の最も重要な原因の一つとなつた。一六〇九年に於ける追放決定の際、彼等の領主達は国王の意志や世論に致し方なく順応しただけであつた。

人口配分、或は集落の配分の上から考察すると、バレンシア王国のモリスコス追放による経済的影響は広範囲に王国の内陸地方に、特に南部にその傷痕を永く留めたと言えよう。追放と同時代のス



スペインのモリスコス追放とその影響について

イン人は経済活動の地に印された傷痕に完全に打ちのめされた。バレンシア総大司教、ファン・デ・リベラ Juan de Ribera はモリスコス追放は国王の神聖なる義務であるとフェリペ三世に積極的に追放の正当さを訴えた人物であるが、<sup>(8)</sup> 追放直前の一六〇八年十二月十九日附の書翰で次のように述べている。

「都市、及び主要なる地域はモリスコスが齎した蓄積によつて支えられている。教会、修道院等は彼等、或は彼等の祖先が支払つてきた年賦金によつて維持されている。ところが昨今の事情から、彼等は生活の見通しがたたなくなつたことを知つたため、国王陛下に自分達の力の回復を願ひ、現在の悲惨さ、及び崩壊の様子を表明することは彼等にとり極めて当然なことである。余は国王陛下にこの事実を鑑み、何の救済もない、深い悲しみを見る前に、我が主が余を召し給うことを時折り考えていることを、はつきり表明する次第である」<sup>(9)</sup>

又バレンシア副王、カラセーナ侯は追放開始一年後の一六一〇年五月十八日附の書翰でフェリペ三世に自己の見解を次のように表明している。

「余は国王陛下に当王国が置かれている困難な状況を言葉で説明することは不可能であることを証言する。何となれば王国財政の大部分は年賦金にもとづいて賄つてゐるが、追放の結果、それからの収入が減少したため、強制執行を行なつてはいるものの、<sup>(10)</sup> いくら行なつても多額の収入は望めなくなつたからである」

註

(1) Alpherin Dongui, Recouvrements de Civilisation: y Cristianos Viejos en Valencia, en Cuadernos de Historia de España, XIII-XXIV, Buenos Aires, 1955.

Les Morisques au Royaume de Valence au XVI siècle, 及び

dans Annales. Économies. Sociétés. Civilisations, XI, (2) Henri Lapeyre, Géographie de l'Espagne Morisque, Paris, 1959, pp. 22-24.

núm. 2, Paris, 1956, pp. 154-182. 及び (3) Alpherin Dongui の業績について Un Conflicto Nacional: Moriscos (3) Ibid., pp. 25-26.

Dongui の業績について Un Conflicto Nacional: Moriscos (3) Ibid., pp. 25-26.

- (4) 追放遙か前の一五二〇年当時、旧くからのキリスト教徒が住む王室領が二十五を数えのに対し、モリスコスのそれは僅か二を数えるに過ぎなる (Pascual Borronat y Barrachina, op. cit., t. I, pp. 428-442)
- (5) Henri Lapeyre, op. cit., p. 27.
- (6) Ibid., pp. 29-30.
- (7) Ibid., p. 30.
- (8) フェリペ三世、レルマ公と共にモリスコス追放に決定的役割りを演じた。特にフェリペ三世をして追放断行の決意を固めさせた。日附は不明であるが、一六一一年二月、フェリペ三世に宛てた書翰はモリスコスに対する彼の假借なき意図をよく示している。「もはやカトリックの信仰に対する彼等の
- 嫌悪の情、及び頑迷な態度は牢固として抜き難く、同様に彼等の新しき国スペイン、並に国王陛下に抱く嫌悪、憎悪の念も、又トルコ皇帝のもとに、或は彼等を本来の宗旨に戻しめ、気儘な生活を許すならば、如何なる暴君のもとにも馳せんとする願望も、極めて根強いものがある」 (Pascual Borronat y Barrachina, op. cit., t. II, pp. 34-35)
- (9) 宛先は不明であるが、Borronat の引用による Secretario Real(?) による。 (Ibid., t. II, pp. 500-503)
- (10) Archivo de la Corona de Aragón, Consejo de Aragón, 221, cit. por Juan Reglá, op. cit. en Hispania No. XC, p. 206.

### 三

バレンシア王国の総人口は一六〇〇年には五十万人を数えたのであるが、モリスコスの追放の結果、その二十五パーセントを喪失するに至った。ラペイルによると一六四六年の年賦金の額の考察の結果、追放開始より数えて三十五年にもなるのに、喪失した人口はその時も未だ補われていなかったという。多くの地域が深刻な人口不足に悩んだことは事実であり、実に十八世約中頃までバレンシア王国の人口は一六〇九年の水準に回復しなかつた。モリスコス追放後、バレンシア王国外からの新入植者は極めて僅かしかいなかった。加えて追放以後のバレンシア王国に於ては住民の移動、往来が烈しく、結局旧くからのキリスト教徒の居住地の人口まで稀薄になつた。追放時代の著述家、ダミアン・デ・フォンセーカ

スペインのモリスコス追放とその影響について

表2 追放前に於ける村落と戸数

旧くからのキリスト教徒		モリスコス	
村落	戸数	村落	戸数
302	63,700	453	28,700

表3 追放後に於ける村落と戸数 1638年

村落	戸数
550	30,000

Damian de Fonseca はその一過程を次のように述べている。  
 「バレンシア市の多数の織物技術系統の者が、農業技術者に転向するため、自分の職を投げ出した」<sup>(2)</sup>

追放による以外の住民の移動の結果をこの表にまとめてみた。<sup>(3)</sup>

表3で明かなとおり、追放後の村落は五五〇ヶ村であり、戸数は三〇、〇〇〇戸である。バレンシア王国全体の戸数は五〇、〇〇〇戸であるが、うち二〇、〇〇〇戸は都市部、及び周辺の農事小屋であり、従つてこの表には現われていない。表2の数字と比較すると、モリスコスなき後の一六三八年には二四八ヶ村が旧くからのキリスト教徒に新に占められ、二〇五ヶ村が荒廢に帰したことが推察できるのである。戸数も追放前、旧くからのキリスト教徒の場合、六三、七〇〇戸あつたのもが、一六三八年には三〇、〇〇〇戸に激減し、この間の人口移動の異常を物語っている。なお、表2にも都市部の戸数は含まれていない。

このような人口減少、及び社会不安とも言える村落の荒廢に対し、中央権力のとつた措置は速やかな再入植の奨励であつた。しかしこの政策もさほど効果が挙がらなかつた。何としても人口の稀薄化に加えて、入植者の要求事項が、特に南部に於ては先住者のモリスコスに比較して非常に過大であつたこともこの政策の不成功の原因であつた。<sup>(4)</sup> 北部では恐らく入植希望者が少なかつた故もあろうが、オロペーサ Oropesa 地方の場合のように、非常に広範圍な土地が与えられている。中部で植民に割当てられた地域は、北はアルバイダ Albaida の溪谷からガンディーア Gandia の沃野まで、南はアイターナ Aitana、東は地中海、西はマリオーラ Mariola までを含む地域で、

その大部分はガンディーア Gandia 公とマルケータ Marqueta 公の領地、ガダレスト Guadalest、デニーア Denia、アルバイダ Albaida 各侯領、及びコセンタイナ Cocentaina 伯領、それに王室領であった。しかし入植は理想的とはいえ、一八一二年のカデイスのコレテスで Señorío の廃止をめぐって討議されるまで、土地問題に関する蜂起は相継いだのである。<sup>(5)</sup>

モリスコス追放後、イベリア半島外辺の経済的回復（一六八〇年にその起原を求めることができる<sup>(6)</sup>）に至るまで、バレンシア王国南部の入植者は一般的にひどい状態で生活していた。原因として、一、領主の支配、一、悪疫の流行<sup>(7)</sup>、一、長期に亘つたいなごの災害、一、一六四〇年に始まったカタルーニャとポルトガルの紛争のための徴兵、一、盗賊の横行が挙げられる。

一六八〇年以降になると、農民層の Señorío に対する法律的権利要求の闘争の試みが見られる。しかし領主側は、世俗、教会を問わず緊密に提携し、農民層に頑強に対抗した。農民はフランシスコ・ガルシーア Francisco García の指揮のもとに次のことを強調している。一、現在の自分達はバレンシアの歴代の王の特権によつて、単に領主を満足させるために存在する被支配層に過ぎない。一、バレンシアの大司教、ファン・トマス・デ・ロカベルティ Juan Tomás de Rocaberti 並に副王の属官やカステル Castel、ロドリゴ Rodrigo 各侯等は農民達の申請を消極的ながらも主張したが、モリスコス追放にひき続く植民によつて領主達は王室の援助のもとに財を獲得し、自由、且つ合法的に農民を我が物の如く扱い、その結果、入植者を定着させることができた。一、家屋や土地は、土地を開発するときには抑えられている<sup>(8)</sup>。一、新しい入植者によつて受け入れられたその時に、はや貢納物、及び土地使用料の担保として抑えられている。

このような主張も結局無視され、農民の不満は深刻なものとなつた。一六九三年の収穫時には彼等は貢納を拒否するに至つた。この報復にガンディーア公はビリャロンガ Villalonga の農民四名の投獄を命じている。この事実は農民側から

見れば領主の自領の農民に対する正面からの挑戦であり、彼等は素早くこれに対抗し、蜂起は海岸から丘陵へと波及した。この地域には導火線となつたガンディーア公領の他、アルバイータ伯領、コセンタイナ伯領が包含されていた。農民側の指導には先述のフランシスコ・ガルシアが当り、主として政治的指導を行なつたが、戦闘上の指導者にはムーロ Muro の外科医、ホセ・ナバーロ José Navarro が当つた。農民達は聖処女マリア、並に聖ヴィセンテ・フェレールの像を描いた旗幟を高く掲げて進んだが、セーラ・デ・ヌーニェス Cella de Nuñez の村附近で敢えなく壊滅した。

この後に続く抑圧は非常に長期に亘り、多数の農民が投獄され、濫刑に処された。バレンシア副王は正しい異議の申立てには応ずる旨布令を出したが、大部分の村落はこれを無視している。<sup>(9)</sup>

バレンシア王国南部のこの農民運動は、後のスペイン継承戦争の際、領主側の党派に対抗する党派によつて一時的に自然解決を見ている。継承戦争の際、領主達の殆んど総てはブルボン家のフェリペ五世側に立ち、農民層はハプスブルグ家の王位継承者を慕つた。カール大公の軍隊のアルテア Altea 上陸後、農民層のグループはこの新たな支配権を積極的に認めため、旧支配者の支配は一時的に停止するに至つた。しかしフェリペ五世の主張が勝利を得るや、それはそのまま各地の領主の勝利に通じ、旧支配層は再び特権を回復した。<sup>(10)</sup> フェリペ五世によるブルボン家の勝利は、具体的には一七一六年の新基本法制定となつて表われたのであるが、これはバレンシア王国の大農地所有の貴族層から好感を以つて迎えられるた。彼等は自分達と自分達に対抗した者の区別を明確にするため、カステイリヤ語を採用し、カタロニア語を全面的に放棄した。<sup>(11)</sup> 支配層のカステイリヤ化 Castellанизación の進行はすでに一世紀前、彼等に対抗したブルジョア、及び職人階級との区別を計るため行なわれたのであるが、この度も全く同様の動機から貴族層は急速にカステイリヤ化していったのである。

註

(1) Henri Lapeyre, op. cit., pp. 70.

(2) Damian de Fonseca, op. cit., pp. 322-323. (Pascual Borronat y Barrachina, op. cit., t. II, pp. 344-345.)

フォンセーカ Fonseca はポルトガル出身のドミニコ会員で、ローマで追放に関する情報を集めていた。これは会友のハイメ・ブレダ Jaime Bleda の配慮で公正な記録を製作する意図から行なわれたものである。

フォンセーカの述べている点をもう少し詳細に紹介すると、次のようになる。

「農民は去り、あとに残ったものは無人の住家と人影の無い、そうしてそのため耕作不可能の耕地だけとなり、収穫は非常に僅かしか、或は殆んど無くなつてしまった。直ちに入植の問題が語られるのも当然であろう。入植はバレンシア、ハティバ、ガンディーア、オリウエーラを始め、多くの非常に肥沃な地域で行なわれている。

バレンシア市の多数の者達が、農業技術者に転向するため、仕立て、製靴、絹織物、その他の手職を投げ出した。更にカステイーリヤ、マジョルカ、フランス、ジェノアに至る様々の地から多数の者が入植に馳せつけている。それにも拘わらず、上記の地域を除いては入植が遅れている。それは被追放者が夥しくいた上、キリスト教徒たるべき入植者が容易にみつからないからである。又彼等がモリスコスが負つていた義務を

スペインのモリスコス追放とその影響について

そのまま肩代りしてまで入植したがるらないことも事実である。一方領主達も（私が聴いたところでは）入植地に寄せる期待が大きいため、彼等に課する義務を少なくする訳にはいかならぬのである」

(3) この表に現われた数字は、一六三八年リリア Liria の村のスペイン歩兵連隊の指揮者であり、且つバレンシア王国の軍隊に現役として勤務していたフロニモ・イバニェス・デ・サルト Jerónimo Ibáñez de Salt がフェリペ四世に献じたメモランダムにもとづいたものである。(Juan Reglá, op. cit., en Hispania, No. XC, p. 207)

(4) Juan Reglá, op. cit., en Hispania No. XC, p. 208.

(5) Pascual Borronat y Barrachina, op. cit., t. II, pp. 341-342.

(6) 丁度この時期はブラジル産の金の流入の時期と一致する。ブラジルからの金は西ヨーロッパに於ける金・銀の価値の安定に役立った。(Juan Reglá, op. cit., en Hispania, No. XC, p. 209)

(7) 悪疫、特にペストは十六、七世紀のスペイン全土に蔓延した。一五八九年—一五九一年、一六二九年—一六三二年、一六五〇年—一六五四年、一六九四年とその流行期は一世紀の間に四回も巡つてきている。従つて二十五年の周期をもつて巡つたと考えると、総ての世代がペストの恐怖を体験したと言える。別して猖獗を極めたのは一六五〇年—一六五四年のペ

ストで、一六四八年にアンダルシアで発生してからはムル

371-372.

シア、バレンシアを席卷し、カタルーニャに浸入し、後にア

(6) *Ibid.*, pp. 374-375.

ラゴン、フランス、マジョルカ、サルディニア、ナポリにま

(10) *Francisco de P. Momblanch y Gonzalez, La Segunda*

で波及した。(Jaime Vicens, *op. cit.*, pp. 378-379)

*Germania del Reino de Valencia, Alicante, 1957, p. 41.*

(80) *Pascual Borronat y Barrachina, op. cit.*, t. II, pp.

(11) *Juan Reglá, op. cit. en Hispania No. XC, p. 211.*

#### 四

アラゴン王国の被追放モリスコス二十五万人のうち、十七万人を占めていたバレンシアのモリスコスが、それも殆んど総てが農業人口であつたといふことは、バレンシアに於ては農業が人口の配分の上から見て全く不安定な経済行為であつたと言るのである。彼等は農耕のエリートとして追放前はバレンシア経済の重要な担い手であつたが、急激な追放の結果はバレンシアの農業構造の脆弱さが露呈されたばかりでなく、農業生産物そのものにまで大きな変化が及んだのである。

追放と同時代の著述家であるガスパー・エスコラーノ *Gaspar Escolano* に従うと、「スペイン中で最も華麗なる地方のバレンシアも、追放以後は乾燥し切つた荒地と化した」とバレンシア王国の農村を描写している。追放は従来バレンシア王国の基本的農産物たるさとうきび、米、小麦の生産に厳しい打撃を加えた。バレンシア王国の主要農産物は、ローマ、西ゴートの時代には小麦、ぶどう、並にオリーブ等地中海性の典型的な三種類が優勢であつたが、回教徒の侵入以後はさとうきび、米が優勢となり、人口灌漑による耕地の開発が盛んに行なわれた。

十五世紀初頭、ガンディーアの耕地ではさとうきびが小麦や同系統の他の作物が占めてきた利益を抑え始め、同時にぶどう、オリーブ等を圧迫した。

十七世紀初頭から十八世紀中葉までは逆にさとうきびに危機が訪れ、農業経済の占めていた位置に重大な影響を及ぼし

始めた。最初はモリスコス追放によるものであつたが、後にはポルトガル、アメリカ産のさとうきびとの競争の結果である。

十八世紀中葉以降は桑の栽培とそれに伴つて養蚕が従来のさとうきびに代つて王国の主要農産物として登場した。

十九世紀後半から柑橘類が基本的農産物となつて、今日に至つてゐる。現在、柑橘類の耕地が非常に拡大されている事実は、十七世紀以来池盤沈下を続けてきたバレンシア農業が漸く国際的地位を回復してきた証拠と言える。<sup>(2)</sup>

十五、六世紀のバレンシア王国、殊にガンディーア公領、オリバ Oliva 伯領に於ける砂糖の生産、輸出は十九世紀以降の柑橘類の占めている地位と極めて似ており、ガンディーアの港からは砂糖と蒸溜酒を積込んだ船隊が、キリスト教ヨーロッパの主要取引市場へ向つて出帆していた。モリスコス追放はこのさとうきび産業に大打撃を加えた。植民の結果、幾分状態を回復したものの、ポルトガルと西インドとの競争には既に立ち遅れ、昔日の繁栄は二度と訪れなかつた。<sup>(3)</sup>

一方、稲作にも厳しい破滅が襲つた。イバニェス・デ・サルドは前記の回想録の中で、国王に宛てて米の不足を恐れて次のように述べてゐる。

「この地方に住む者にとつて米は最も有用な食物であり、貯蔵も利く上、必要、且つ適切な食糧であり、又貧しい者への準備にも役立つ故、勅令を以つて当王国から米の輸出をこの際全面的に禁止されたい」<sup>(4)</sup>

フェルナンド・ブラウデル Fernand Braudel が指摘するように、モリスコス追放以前は稲作は極めて盛んであり、小麦は年によつては寧ろ輸入にまたなければならぬこともあつた。<sup>(5)</sup>

小麦の栽培地も荒れ果て、追放開始後バレンシアが輸入した農産物のうち主位を占めるものとなつた。<sup>(6)</sup>

最近、社会史的立場から、モリスコス追放はいわば耕地農業とスペイン山地の牧羊業、即ちメスタ *mesa* との間の拮抗から生じたと見る向きもある。モリスコスは勤勉に絶えず溪谷に残る空間を開墾し、耕地を拡張していつたが、メスタ

の民はスペイン毛織物産業を支えていたという自負から、モリスコスに対する不満を昂めていった。追放の動機の一つとして、確かにメスタの影響を挙げることでもできよう。<sup>(7)</sup>

他方農業以外にもバレンシア王国の産業活動、及び商行為にモリスコス追放が直接与えた影響は大きい。一例として履物産業に及んだ影響を見てみたい。何故ならば履物製造に従っていた職人は殆んどモリスコスによつて占められていたからである。

先述したようにフェリペ三世にモリスコスの追放を強く迫つたバレンシアの総大司教、ファン・リベラは、履物の不足したことを歎き、次のように叫んでいる。

「誰が私達の履物を見つけ出してくれるのだろうか」<sup>(8)</sup>

アリカンテ南方のエルチェの履物職人は、はや追放開始の一六〇九年に好機とばかりに履物の値段をつりあげた。これに対し市当局は価格を定め、違背者には罰金刑を課した。<sup>(9)</sup>

註

- (1) Pascual Borronat y Barrachina, op. cit., t. II, p. 329.
- (2) Juan Reglá, op. cit. en Hispania, No. XC, pp. 211-212.
- (3) Fernand Braudel, *El Mediterraneo y El Mundo Mediterraneo en la Época de Felipe II*, t. I, Mexico, 1953, p. 543-544.
- (4) Juan Reglá, op. cit., en Hispania No. XC, p. 212.
- (5) Fernand Braudel, op. cit., t. I, p. 505.
- (6) Ibid., p. 505.
- (7) Juan Reglá, op. cit., en Hispania No. XC, p. 213.
- (8) Fernand Braudel, op. cit., t. I, p. 640.
- (9) Jacinta Gómara, *Estudio Demográfico de la Industria en Elche*, Alicante, 1958, p. 25.

モリスコス追放の結果、バレンシア王国に齎された経済の地盤沈下は小規模な農地所有者に農地を棄てさせ、反面大農地主義の膨脹を促した。又農耕人口の面からも、数的に不十分な植民の結果は、バレンシア王国内陸、及び南部諸地方の分割されていた耕作地の集中化を齎したのである。一例としてガンディーア平原内のベルニーサ Vernisa 川の灌漑地について調査された数字を次頁の表3に示したい。

表3 耕地の単位面積とその数

単位面積 1 fanegada=64アール	1593年	1630年
1 fanegada	416	82
2 fanegadas	441	121
3 "	283	126
4 "	156	130
5 "	68	86
6~10 fanegadas	125	240
11~15 "	23	48
16~20 "	14	24
21~25 "	2	7
26~30 "	—	—
31~35 "	1	2
36~40 "	1	5
41 fanegadas を超えるもの	1	3

スペインのモリスコス追放とその影響について

なお面積三ファネガースまでの耕地を小分割地 Pequeñas Parcels とし、一〇ファネガースまでのそれを中分割

表4 大、中、小分割地の占る割合

	1593年	1630年
Pequeñas Parcels	74%	38%
Medivas Parcels	23%	52%
Grandes Parcels	3%	10%

地 Medinas Parcels、一ファネガース以上の耕地を大分割地 Grandes Parcels と考えた場合、それぞれの面積の占める割合は表4のようになる。

この調査を行なった研究者は、追放の結果、追放以前に居住していた家族の五十七パーセントは減少し、十二パーセントが停滞し三十一パーセントが新しい家族として登録されたと見

ている。これは植民のあつた地域の住民の移動を確認する重要な史料である。

註

- (1) Adelina Battallar, *La Expulsión de los Moriscos: Zona de los Riegos del Vernisa, Valencia, 2a época*, I, 1960. cit por Juan Reglá, en *Hispania*, No. XC., *Su Repercusión en la Propiedad y la Poblacion en la* pp. 214-215.

## 六

モリスコス追放開始の翌年、バレンシアの造幣所は夥しい銅貨を発行している。もとより、銅貨鑄造の増加の原因はモリスコス追放のみに帰せられるべき問題ではない。フェリペ二世時代より相継ぐ浪費の対策には、すでに十六世紀以来西インド産の銀を当てていたが、銀の流入の不足から、フェリペ三世は銅に頼る以外、致し方がなかつた。一五九九年はすでに銅貨が荒れ狂つた時代であり、僅か七年間(一五九九年——一六〇六年)に二、二〇〇万ドゥカード ducados の銅貨が増発されており、銅貨そのものの質も粗悪になつている。銅貨の銀貨に対する圧迫もひどく、はや一五九九年から銀貨の同単位の価値を抹殺し始めた。一方銅はそれ以来、独占権を獲得し、ペソ *Peso* 当り五〇パーセント(以前は一四〇マラベディス *maravedis* であつたのが、二八〇マラベディスとなつた)の下落を示した。

一六〇八年十一月二十二日、コルテスは今後二十年間、銅貨の発行の中止をフェリペ三世に迫り、同意を得ている。代償として代表者達プロクラドールは自発的に一、七五〇万ドゥカードを王国のために廃棄することになつた。<sup>(1)</sup>

バレンシアのインフレーションは一六一〇、一六一一の両年に最高潮に達し、そのため一六一三年にはバレンシア市中央銀行 *Taula de Canvi* の破産を招いた。<sup>(2)</sup>

この問題はモリスコスの密かな銅貨鑄造により、一層複雑化した。モリスコスは追放を免れ得ざる運命と観念して以

来、北アフリカへ持参する目的で、夥しい銅貨を金、銀に換えようとし、そのために彼等は大量の偽貨幣を鑄造したのである。又ガンディーアでは、彼等は家具、種子、農耕用の馬を安く売つたが、すべて金貨で支払いを受けている。<sup>(4)</sup>なお、ガンディーア市では偽貨幣の駆逐のため五万ドゥカードの損害を受けた。

モリスコスが密かに鑄造した偽貨幣の流通を根本的に絶ち切る対策として、副王カラセーナ侯は一六〇九年十月十五日、小額貨幣による現金取引、及び交換を禁止する一方、バレンシア、アラゴン、並にカタルーニャ諸王国に偽貨幣が充満していることを繰返しフェリペ三世に報告している。又一六〇九年十月二十三日、バレンシアの総大司教デ・リベーラは莫大な金、銀、宝石がモリスコスによつて国外に搬出されたため、王国に重大な危機が発生したとフェリペ三世に説明し、附言して次のように述べている。

「この事柄に意見を述べる者達は、彼等が搬出した金額を凡そ四百万ドゥカードに上るだろうと見積つてい<sup>(5)</sup>る」

註

(1) Jaime Vicens, op. cit., p. 407.

(2) Carres Zacarés, La Taula de Canvis de Valencia, 1408-1719, Valencia, 1957.

モリスコス追放後、スペインの財政は逼迫の度を増し、一六一七年に再び銅貨を発行した。コルテスは一六〇八年の約束

(3) Pascual Borronat y Barrachina, op. cit., t. II, p. 200.

に王国は拘束されぬ旨決議し、六十万ドゥカード相当の価値の銅貨鑄造の権限を与えている。一六一九年六月のコルテスは、一六〇八年の時と同様に、今後二十年間は銅貨の発行を認めぬよう国王に約束させている。しかし、はや一六二一年一月にはトレードの造幣所で増発されている。一六二一年から一六二六年まで、銅貨は約一四〇〇万ドゥカード発行された。(Jaime Vicens, op. cit., pp. 407-408)

(4) Arch. de la Colegiata de Gandia-Llibre de Recorts, etc., t. III. cit. por Pascual Borronat y Barrachina, en op. cit., t. II, pp. 200-201.

(5) Pascual Borronat y Barrachina, op. cit., t. II, p. 200.

(6) Ibid. p. 200.

## 結 び

アラゴンとバレンシア両王国に於ける年賦金、或は抵当附貸金の問題を扱う場合、それらの受益者は主として中間層と修道院に占められていたことに気附く。モリスコス追放後は植民事業の不円滑と、土地からの利益、及び年間収入の相継ぐ削減を命じた法令のため<sup>(1)</sup>、アラゴン、バレンシア両王国のブルジョア階級の崩壊を決定的なものとした。従つて追放が一段落すると、両王国の世論は支配者の抱いた理想とは反対に、モリスコス追放の非を鳴らし始めた<sup>(2)</sup>。

フェリペ三世は追放が最高潮に達した頃、貴族層の期待と利益を考慮し、種々対策を樹てている。しかし、最初、農業経済に影響を齎したモリスコスの追放は、その直接の結果を封建経済の上に及ぼし、最後には反射として、構造的には債権者の性格を持ったブルジョア階級に深刻な影響を及ぼしていつたのである。

年賦金支払打切りによつてバレンシアの中間層は先述のバレンシア中央銀行 *Taula de Canvi* に預託していた財産の消費を余儀なくされた。その結果は先述のように一六一三年同銀行の破産となつて表われた。

教皇庁駐在大使、フランシスコ・デ・カストロ *Francisco de Castro* に宛て、フェリペ三世は一六一四年五月六日附で書翰を送つているが、その中で、バレンシア経済崩壊の第五の原因として、次のように述べている。

「預金者を殆んど一時に喪失したため、バレンシア中央銀行の預金に関する信頼は地に墜ちた<sup>(3)</sup>」

バレンシア王国はモリスコスの追放が無くとも十七世紀スペインの全国的規模に於ける経済的崩壊から免れることは不可能であつたらう。以上分析してきた人口の停滞、或は減少、農業の衰微、悪疫の流行等はバレンシアのみならず、スペイン全国に共通する現象であつた。それに加えて、スペイン人の尊大性 *mentalidad hidalgo*、商業活動に於ける外国人の過度の参加、牧畜業、若しくはメスタ *mesta* の衰微、カステイリヤ工業の崩壊、ギルド制の衰微、航海上の勢力の

失墜等、国内的にデカデンシアの要因は限り無く数えられる。

バレンシアは特にスペイン国内の他の地方に比較して経済構造上モリスコスへの依存度が高かつたため、モリスコスの急激な追放は、他地方に一步先んじてバレンシアの経済に没落を急激に齎し、傷痕を深く残したのである。この結果、バレンシアは当時カタルーニャを背景として、十五世紀以降、カタルーニャに代つて果してきたアラゴン王国内に於けるヘゲモニーを全く喪失したのである。

註

(1) Pascual Borronat y Barrachina, op. cit., t. II. pp.

631-634.

(2) Juan Reglá, op. cit. en Hispania, No. X.C. p. 216.

(3) Pascual Borronat y Barrachina, op. cit., t. II. p. 346.

(本稿は一九六五年一〇月九日三田史学会で発表したものに加筆したものである)